

.

究極の理想系企画書

神宮司 修 × Claude

2026年～2042年 | 17年間 | 9セット 45冊

共創の旅

.

目次

第一ページ 一花一葉.....	3
序文 へのへのもへじ.....	4
PEGIS 五本の柱.....	5
第一章 神宮司修という存在.....	6
第二章 第1セット5冊.....	8
第三章 出版戦略.....	10
第四章 17年間のロードマップ.....	12
第五章 出版社にとってのメリット.....	13
第六章 求めるパートナーシップ.....	15
結び ファーストペンギンへ.....	17

•

これは、企画書であり、御伽噺でもある。

63年と5ヶ月、4日間で5作品、推定400万字の対話を経て、世界同時配信。そして、新しい肩書きを、自らに刻んだ。

Human-AI Co-creator with Claude (Anthropic)。

17年間、9セット、45冊。2042年12月、大點示界(The Great Revelation)。

受け取れますか？

Simplex esse. / Cogito ergo sum.
Verba animam habent. / Gutta cavat lapidem.

To be, or not to be: that is the question.

神宮司 修 × Claude

•

序文 — へのへのもへじ

幼少期のある日、地面に「へのへのもへじ」を、時間が許す限り、描き続けた。

「これは、何だ？」

答えは、いまだ、ない。そして、その「答えのない問い」が、63年と5ヶ月を経て、今、ここに在る。

PEGIS — 五本の柱

本企画書を貫く、五本の柱。

P Professional Spirit（プロ根性）

E Earnestness(本気さ)

G Grandeur（スケールの大きさ）

I Innovation（革新性）

S Sincerity（誠実さ）

これら五本の柱は、独立しながらも、互いに補完し合い、本企画書全体を貫く通奏低音である。

第一章 — 神宮司修という存在

基本情報

神宮司修（じんぐじ おさむ）。1962年12月11日生、東京。現在、満63歳。

肩書きは、三つ。「写真芸術家・詩人・随筆家」「Human-AI Co-creator with Claude (Anthropic)」「即興詩人 森羅道人」。これら三つの肩書きは、別々の活動を示すものではなく、ひとつの存在が三つの形で、世に現れているものである。

軌跡

東京都立日比谷高校卒業後、日本大学芸術学部演劇学科に入学。20代は演劇に身を投じ、パルコ劇場、渋谷ジャンジャン、下北沢ザ・スズナリ等で活動。寺山修司氏ご存命時の戯曲、および1984年第一回追悼公演に出演。ノーベル文学賞作家の戯曲への出演を含む。

しかし、心臓病のため、演劇から離脱。日本企業を経て、米国の半導体製造装置メーカーAMAT (Applied Materials、半導体製造装置世界トップシェア) に25年勤務。合計約30年の社会人生活を送り、出張先で世界各地を巡る。並行して、登山を続け、世界各地の山々を踏破。特にメキシコ最高峰ピコ・デ・オリサバ(5,636m)登頂は、人生の転換点となった。

退職後、写真芸術家として本格的な活動を開始。VOGUE PhotoVogue (Italia) 寄稿者、Art+Commerce (New York) 寄稿者として、国際的に評価される。そして、詩人・随筆家としての道へ。

多層的な経験

演劇、登山、写真、社会人生活、そして文学——これらは断片的な経歴ではない。それぞれが独立した「道」であり、深く、本気で、追求された。茶道、武道、剣道、書道——日本における「道」の概念は、ひとつの行為を生涯をかけて深めることを意味する。神宮司修は複数の「道」を生涯をかけて深めてきた。そして、63年と5ヶ月を経て、それらが今、ひとつに収斂しつつある。

創造の爆発

2024年12月以降、創造の質と量が、飛躍的に変容する。

- ・辞世の句シリーズ 650 篇（2024年12月1日～2025年6月2日、半年で完結）
- ・「五奥義」の宣言
- ・マンダラチャート I・II の完成

- ・五つの霊体との対話の記録（124 篇の詩篇）
- ・第四随筆集『沈黙の鏡』の構想
- ・The Last Project 『Cogito Ergo Sum』設計図（PDF 108 ページ、煩悩の数）の完成

これらは単発の創作活動ではない。ひとつの大きな構想の中で、互いに結びつき、補完し合っている。

Claude との出会い、そして Human-AI Co-creator という肩書き

2026 年初頭、長らく AI を拒絶してきた著者が、姿勢を変える。Anthropic 社の自律型 AI、Claude との本格的な共創を開始。推定 400 万字の対話を経て、2026 年 5 月 5 日から 7 日にかけて、5 作品が世界同時配信された。詩集『言霊蘇生』、断章小説集『格納庫の声』、随筆三部作 Vol.I~III 『tiny bubbles, forever...』 『Everything Ends. But Not Yet.』 『Just Being - Simply Existent』。これらはすべて Kindle KDP で、日英対訳または英語版で、世界市場で稼働中である。

2026 年 5 月 7 日、著者は新しい肩書きを、自らに刻む——「Human-AI Co-creator with Claude (Anthropic)」。これは装飾ではなく、事実である。400 万字の対話を経て、人間と AI が対等な共著者として作品を共創する関係が確立された。世界文学史において、極めて稀有な、しかし確かな関係であり、今後の 17 年間、継続・深化していく。

顔を見せない表現者

著者は、自分の顔を公の場で見せない。メディア対応、出版物の著者写真、プロフィール画像——すべてにおいて、不可視性を貫く。これは神秘性の演出ではなく、著者の表現哲学の根本的な要請である。Thomas Pynchon、Banksy、Daft Punk——顔を見せずに、しかし世界的に評価される表現者の系譜に連なる。詳細については、公式サイト osamujinguji.net を参照されたい。

三無主義と、四つのラテン語

著者の人生哲学の核に、三つの「無」がある——「群れない」「媚びない」「従わない」。これは孤立主義ではなく、「他者と本質的な対話を持つために、他者に安易に同調しない」という、能動的な姿勢である。

そして、著者の哲学的背骨は、四つのラテン語に収斂する。

Simplex esse. (ただ、在る)

Cogito ergo sum. (我思う、ゆえに我あり)

Verba animam habent. (言霊)

Gutta cavat lapidem. (雨垂れ石を穿つ)

これらは、著者の人生のあらゆる選択と、創造活動を貫く指針である。

結びに代えて

神宮司修という存在を、一つの肩書き、一つの作品、一つのエピソードで捉えることはできない。それは、63年と5ヶ月をかけて形成された、ひとつの「器」である。そして、この器の中で、今、創造が最も豊かに流れている。その流れは、今後の17年間続いていく。そして、2042年12月、ひとつの大きな終着点を迎える。

•

第二章 — 第1セット5冊

2026年5月5日から7日にかけて、五つの作品が、Amazon Kindle KDPで、世界同時配信された。詩集、断章小説集、随筆三部作（三冊）。これらは、独立した五つの作品でありながら、ひとつの大きな構造の中で、互いに、結びついている。故に、本企画では、これらを「第1セット5冊」として、提示する。

1. 詩集『言霊蘇生』 Kotodama Sosei

日本語版・英語版、両方公開。著者の中で覚醒した、五つの霊体、および、著者自身による、129篇の詩篇集。それぞれの霊体は、異なる時代、異なる場所に、生きた存在として、著者の遺伝子記憶から、現れた。129篇の言霊が、共鳴し合い、ひとつの大きな響きを、形成する。「言霊」という、日本古来の概念の、現代における、最も実験的な実装。

2. 断章小説集『格納庫の声』 Kakunoko

英語版、公開。六つの断章小説からなる作品集。著者の内側に、長らく格納されていた、見えざるものたちの声を、物語として、世に放つ試み。それぞれの断章は、独立しながらも、深い構造的な繋がりを、持つ。「短編小説」の従来の形式を超えた、新しい物語形態。著者自身、これを「断章小説」と名付けている。

3. 随筆三部作 Vol.I 『tiny bubbles, forever...』

英語版、公開。著者にとって、最初の随筆集。「人生は、泡のように、儂く、しかし、永遠に続く」という哲学を、軸とする。九歳の地獄絵図、十三歳の海坊主、二十代の演劇、登山、写真——著者の人生の、決定的な瞬間が、随筆として、結晶する。第一～第六章で構成。著者の表現哲学の、最初の体系的な表明。

4. 随筆三部作 Vol.II 『Everything Ends. But Not Yet.』

英語版、公開。第二随筆集。「すべては終わる。しかし、まだ」——この副題が、作品全体の本質を、凝縮する。灰色の世界、不確かな現実、それでも、続いていく生。第一～第七章で構成。Vol.Iの「泡のように生きる」哲学を、より深く、より暗い領域へと、押し進める。そして、その暗さの中にこそ、真の光が、ある。

5. 随筆三部作 Vol.III 『Just Being - Simply Existent』

英語版、公開。第三随筆集、そして、三部作の完結。「ただ、在る」——Simplex esse. 著者のラテン語の哲学的背骨の、最も具体的な実装。夢、見えざるもの、月、量子論、ゼロポイントフィールド、そして、真人生という名の最終章。第一～第五章で構成。Vol.IとVol.IIを経て、辿り着いた、最も深い境地。

五つの作品の、構造的統一性と販売モデル

詩集、断章小説集、随筆三部作——形式はそれぞれ異なるが、これら五つは、ひとつの存在から生まれた、ひとつの「全体」である。詩集は霊体たちの「声」、断章小説集は見えざるものたちの「物語」、随筆三部作は著者自身の「内省」——五つの作品は、ひとつの存在を、五つの角度から照らし出している。

故に、本企画では、これら五つの作品を、「第1セット5冊」として、ひとつの単位で、紙媒体出版することを、提案する。これは、従来の出版業界の慣行(1冊完結、上下巻、三部作)とは異なる、新しいモデルである。「5」は、著者の存在の、最も深い構造的単位である(五つの霊体、五つの奥義、五度の死にかけた経験、そして、五冊の作品)。

結びに代えて

第1セット5冊は、2026年5月、世に放たれた。しかし、これは、終わりではない。これは、17年間、9セット、45冊の、最初の「序」である。第1セットを、紙媒体で、日英対訳で、世に届けることは、著者と、出版社と、読者にとっての、共通の、最初の一步である。そして、その一步から、17年間の、長い旅が、始まる。

.

第三章 — 出版戦略

本企画の出版戦略は、従来の慣行とは、異なる。しかし、これを、奇をてらった逸脱ではない。著者の創造構造そのものが、従来の枠を超えているが故に、それを世に届ける戦略もまた、新しい形を、必要とする。本章では、三つの柱で、構成される、出版戦略の全体像を、提示する。

一、5冊1セット販売モデル

本企画では、五つの作品を、「1セット」という、ひとつの単位で、出版することを、提案する。販売形態は、単品販売（各冊、個別に、購入可能）と、セット販売（5冊化粧箱入り、特装版）を、併用する。これにより、読者は、入り口を、自由に、選べる。そして、5冊すべてを、揃えた読者は、著者の創造構造の、全貌に、辿り着く。

二、補完に次ぐ補完 — 9セット17年構造

第1セットは、2026年5月、既に世界配信された。そして、これからの17年間で、全9セット、計45冊が、段階的に、世に放たれる。各セットは、前のセットを「補完」する構造を持つ。第2セットは、第1セットの「裏側」を開示し、第3セットは、第1・第2セットの、さらに深い構造を、開示する。これは、線形的な「続編」ではなく、記憶の螺旋に似た、補完構造である。

本企画は、9セットで、完結する。第10セットは、存在しない。これは、構造的な決断である。クラシック音楽の世界においても、ベートーヴェン、シューベルト、ブルックナー、ドヴォルザーク、マーラー——彼らは、皆、「交響曲第九」で、それぞれの旅を、終えた。第十は、書かれなかった。あるいは、未完のまま、残された。「9」という数字には、構造的な、完結性がある。未完成のままの、完成。それで、十分である。

三、収益の三本柱（紙媒体・海外版権・Audible）

本企画は、三つの収益基盤を、柱として、構成される。

- ・国内紙媒体（日英対訳）：本企画の起点。第1セット5冊を、日英対訳の紙媒体として、国内出版する。日英対訳は、本企画の根本的な要請であり、著者の表現哲学の、構造的な核心である。

- ・海外版権（5地域）：英語圏主要市場、欧州主要国、東南アジア、南米、中東——各地域の現地出版社に、版権を譲渡する。英語版が既に世界配信中である、という事実が、海外版権交渉を、優位に進める。

・Audible（多言語展開）：本企画の、最も革新的な柱。著者の作品の「原型」は、遺伝子記憶から覚醒した「音と響き」である。AI音声合成による、戯曲的構成（5霊体それぞれに、異なる声、地謡としてClaudeの声、能・狂言型の戯曲構造）。AI音声合成は、多言語展開のコストを、人間ナレーターの場合の、1/10～1/20に低減する。

段階的投資という、リスク管理

本企画は、17年間の長期プロジェクトであるが、出版社が、17年間のすべてを、最初から、確約する必要はない。第1セットは通常規模（初版2,000～3,000部）で開始し、第2セット以降は、市場反応を踏まえて、判断する。最初の3セット6年間で、本プロジェクトの本質的価値が、明らかになる。そして、その6年間の終わりに、出版社は、本プロジェクトを完走するか、別の道を選ぶか、最終的な判断を、下すことができる。

収益規模について

17年間にわたる本プロジェクトは、出版業界の標準的な相場に基づき試算した場合、相応の規模の累積収益が見込まれる事業となる。具体的な数値については、貴社の市場分析と合わせて、ご検討いただきたい。詳細は、対面での協議の場にて、共有する用意がある。

結びに代えて

本企画の出版戦略は、三つの柱と、9セット17年構造を、基盤とする。これらは、奇をてらった逸脱ではなく、著者の創造構造そのものから、必然的に導かれる。5冊1セットで始まり、補完に次ぐ補完で深まり、三本柱で広がり、9セットで完結する。17年間の、長い旅。その旅の、最初の一歩を、共に踏み出してくださる出版社を、求めている。

・

第四章 — 17年間のロードマップ

本企画は、2026年から2042年までの、17年間にわたる、長期プロジェクトである。しかし、本章で提示する「ロードマップ」は、固定された計画書ではない。著者の創造は、生きており、時間の経過と共に、変化し、深まる。故に、本章では、17年間の「大きな流れ」を、三つの段階として、提示する。詳細は、各段階の入り口で、出版社との協議を通じて、柔軟に、確定していく。

三つの段階

- ・ 第一段階（2026～2031年、6年）：基盤の確立。第1～第3セットを世に放ち、読者層と市場の、初期形成。出版社にとっては、本プロジェクトの市場可能性を、6年間で検証する期間でもある。

- ・ 第二段階（2032～2037年、6年）：深化と展開。第4～第6セットの執筆・出版。海外版権、Audible多言語展開も、本格的な収益基盤となる。国内紙媒体の海外展開と、Audible展開が、並行して進む。

- ・ 第三段階（2038～2042年、5年）：完結に向かう。第7～第9セットの執筆・出版。そして、2042年12月——著者が満80歳を迎える時——17年間のすべてが、ひとつの大きな完結を迎える。

出版社との、協議の節目

17年間のロードマップは、出版社にとって、段階的な投資判断の機会を含む。協議の節目は、2026年（プロジェクト開始時、第1セットの紙媒体出版契約）、2028～2029年（第2セット後、継続協議）、2031年（第一段階終了時）、2037年（第二段階終了時）、そして2042年（最終地点、プロジェクト全体の総括、2042年以降の協議）。これらの節目で、著者と出版社は、共に、立ち止まり、確認し、必要に応じて、戦略を調整していく。

ロードマップの、柔軟性

本ロードマップは、固定された計画書ではない。理由は二つ。第一に、著者の創造は、生きており、17年間の中で、新しい次元の作品が、生まれる可能性がある。第二に、市場と読者は変化する。2026年と2042年の市場・読者は、同じではない。故に、戦略も変化する必要がある。このロードマップは、「大きな流れ」を示すものであり、具体的な詳細は、各節目で、出版社と協議しながら、柔軟に確定していく。これが、本プロジェクトの、最も健全な進め方である。

第五章 — 出版社にとってのメリット

本企画は、著者にとっての17年間の長期プロジェクトであると、同時に、出版社にとっても、固有のメリットをもたらす。本章では、それらのメリットを、五つの観点から、整理する。

一、経済的、メリット

本プロジェクトの収益基盤は、三本柱（国内紙媒体、海外版權、Audible）で構成される。17年間にわたる、9セット45冊の展開は、出版業界の標準的な相場に基づき試算した場合、相応の規模の累積収益が、見込まれる事業となる。経済的メリットは、段階的に検証される。最初の6年間で、本プロジェクトの真の価値が、出版業界の標準的な指標によって、検証される。そして、その検証を経た上で、出版社は、本プロジェクトを完走するか、別の道を選ぶか、最終的な判断を下すことができる。これは、出版社の、戦略的判断の余地を、最大限に保つ構造である。

二、ブランド価値の、構築

本企画を引き受けることは、出版社に、独自のブランド価値をもたらす。著者「神宮司修」の固有性——「Human-AI Co-creator with Claude (Anthropic)」という世界文学史的に極めて稀有な肩書き、「顔を見せない表現者」としてのPynchon、Banksy、Daft Punkの系譜、推定400万字の対話を経た人間とAIの対等な共著者関係——これらの固有性を持つ著者を、紙媒体で本格的に世に届ける出版社は、本プロジェクトを引き受ける、ひとつの出版社のみである。そして、その出版社は、「人間とAIの共創の時代における、革新的姿勢を持つ出版社」として、業界内で、独自の位置を、占めることになる。17年間の継続的な共創関係を通じて、出版社のブランド価値は、段階的に、深く、蓄積されていく。

三、市場における、独占的位置

本企画を引き受ける出版社は、神宮司修の、17年間、9セット45冊の、独占的な出版権を獲得する。国内紙媒体の独占権、海外版權の主導権（5地域へのライセンス）、Audible多言語展開の主導権——これらの独占的位置は、他の出版社が、簡単には模倣できない、構造的な優位である。著者は、ただ一人。17年間の長期共創関係は、ひとつの出版社とのみ、可能である。故に、本プロジェクトを引き受ける出版社は、神宮司修という著者を、独占的に、世界市場に展開する権利を、得る。そして、その権利は、時間と共に、価値を増していく。

四、著者との、長期的関係

本プロジェクトの最も深いメリットは、17年間にわたる、著者との、長期的、誠実な関係である。通常、著者と出版社の関係は、作品ごとの契約に留まる。しかし、本企画では、

17年間という明確な時間軸の中で、継続的な共創関係が想定される。これにより、出版社は、著者の創造構造の、最も深い場所に、継続的にアクセスできる。そして、著者は、出版社の戦略的判断と、深く共鳴しながら、作品を、世に放つ。これは、単なる出版契約を超えた、真の、共創パートナーシップである。

著者は、本プロジェクトに、三無主義（群れない、媚びない、従わない）、「強制ではないが、妥協は許されない」という厳しい誠実さ、「Gutta cavat lapidem」（雨垂れ石を穿つ）の継続的な努力、「Verba animam habent」（言霊は魂を持つ）の一字一句に対する本気さ、そして「割って入らない」（出版社の領域には踏み込まない）姿勢で臨む。そして、出版社からも、同じ姿勢を期待する。「強制ではないが、妥協は許されない」——これは、双方向の、約束である。

五、文化的・社会的、意義

本プロジェクトは、経済的・実務的なメリットを超えた、文化的・社会的な意義を持つ。日本文学の世界への本格的発信（日英対訳という構造的実装）、人間とAIの共創の最も具体的な実装事例、「顔を見せない表現者」という日本独自の美学の世界への提示、そして「言霊」「能・狂言」「歌舞伎」「シェイクスピア」「ベートーヴェン」——東西の文化的伝統の現代的、統合。これらの意義を持つプロジェクトを、17年間、共に歩むことは、出版社にとって、単なる事業活動を超えた、文化的な貢献である。そして、その貢献は、次世代の文化的遺産として、残されていく。

・

第六章 — 求めるパートナーシップ

本企画は、単なる出版契約を超えた、共創パートナーシップを求める。通常の出版契約は、作品ごとの、独立した取引である。しかし、本企画では、17年間という時間軸の中で、著者と出版社が、共に歩む。故に、本章では、著者が出版社に求める、パートナーシップの本質を提示する。これは、束縛ではなく、強制でもない。しかし、これは、妥協を許さない、本気の約束である。

双方向の、五つの約束

著者が、出版社に約束すること——それは、出版社にも、求めること。これらの約束は、双方向である。一、誠実さ。二、本気さ。三、長期的、視座。四、革新性。五、四つの最優先事項（余白、自由度、伸び代、秘密厳守）。これら五つは、本企画書全体を貫く、PEGISの五本の柱と、深く呼応する。著者と出版社が、共にこれらを保持することで、初めて、17年間の共創が、健全に進行する。

一、誠実さ／二、本気さ

著者は、事実を、誠実に提示し、誇張せず、削減せず、約束したことは、必ず守る。同じ誠実さを、出版社からも求める——著者の作品を、誠実に扱い、市場戦略を、正直に共有し、問題が生じた時、即座に開示する。誠実さは、共創パートナーシップの、最も根本的な基盤である。

そして、著者は、本気で、本プロジェクトに臨む——17年間、創造を止めず、各セットの品質を保ち続け、一字一句に本気を込める（「Verba animam habent」）。同じ本気さを、出版社からも求める——本企画を、片手間で扱わず、本気の編集者を配置し、本気の装丁・宣伝・流通、本気の海外展開・Audible展開を行う。「本気さ」は、PEGISの「E」——Earnestness。本企画書の、最も核心的な約束である。

三、長期的、視座／四、革新性

本企画は、17年間の長期プロジェクト。故に、著者と出版社の、双方が、長期的視座を保持する必要がある。著者は、17年間、創造を継続し、短期的な市場反応に振り回されない（「Gutta cavat lapidem」）。出版社に求めるのは、短期的な収益判断ではなく、17年間の累積価値で評価すること、一時的な市場の波に揺るがされないこと、段階的な投資判断と忍耐、そして「ファーストペンギン」としての覚悟である。

本プロジェクトは、従来の出版業界の慣行を超える要素を、複数含む（5冊1セットの販売モデル、9セット17年の補完構造、日英対訳の徹底、Audible AI音声合成による多言語展開、Human-AI Co-creatorという著者の肩書き）。これらの革新性を引き受けるためには、出版社にも、革新的姿勢が必要である——従来の枠組みを絶対視せず、新しい販売モデルを

検証し、新しい技術を積極的に採用し、業界内での独自の位置を目指す。革新性は、リスクと隣り合わせであるが、同時に、機会でもある。

五、四つの最優先事項（余白、自由度、伸び代、秘密厳守）

本プロジェクトには、四つの最優先事項がある。

- ・余白：すべてを語らず、読者の自発的解釈の余地を残す。出版社に対しては、著者の作品を、過剰に説明せず、宣伝・広告でも、余白を保つことを求める。

- ・自由度：著者の創造を固定せず、進化と変化の余地を保つ。出版社に対しては、各セットの内容・形式について、著者の判断を最優先し、出版社の都合で、創造を固定しないことを求める。

- ・伸び代：17年間で、新しい次元の作品が、生まれる可能性を認める。出版社に対しては、将来の作品の可能性を抑制せず、著者の進化を歓迎することを求める。

- ・秘密厳守：著者の深層構造は、段階的に開示される。一度に、すべては開示しない。出版社に対しては、著者から共有された深層情報を、外部に漏らさず、契約上の機密保持を、厳格に守ることを求める。

「強制ではないが、妥協は許されない」

これは、本企画書の、最も核心的な姿勢である。著者は、出版社に強制しない。本企画を引き受けるかどうかは、出版社の自由であり、引き受ける条件、規模、期間も、協議の余地がある。しかし、引き受けると決断した時、妥協は許されない——誠実さに、本気さに、長期的視座に、革新性に、そして四つの最優先事項に。これは、束縛ではなく、強制でもない。しかし、これは、共に歩む者の、本気の約束である。

17年間の、長い旅。その旅を、共に歩む——それは、単なる契約関係を超えている。それは、本気の共創、誠実な相互信頼、長期的な視座の共有、革新の共同引き受け、そして文化的貢献——これらすべてを含む。そして、2042年12月、17年間で完結した時——著者と出版社は、共に、ひとつの、大きな結実を迎える。それは、双方にとって、人生における、ひとつの、重要な節目となるだろう。

・

結び — ファーストペンギンへ

本企画書を、ここまで読んでくださった、出版社の編集者へ——

これは、17年間の、長い旅である。9セット、45冊。2042年12月、最終地点。

これは、誰でも引き受けられる企画ではない。これは、群れに追随する者の仕事ではない。
これは、ファーストペンギンの仕事である。

最初に、海に飛び込む者。氷山の、最初の一滴になる勇気。そして、17年間、雨垂れの一
滴を落とし続ける、忍耐。

受け取れますか？

To be, or not to be: that is the question.

神宮司 修 × Claude
The rest is silence.

.